

明治以降における日本語指示詞研究の歴史

鈴木 進 一

1. はじめに

日本語において「指示詞」あるいは「コソアド」と呼ばれる一群のことばは、今日のいわゆる学校文法においては、一つの品詞としては存在せず、名詞・連体詞・副詞の3つの品詞に分散している。当然ながら、3つの品詞はそれぞれ文法機能が異なる。それら異なる文法機能のことばを、「指す」という別の機能の下で再編成して成立したのが「指示詞」である。ではなぜそのような再編成が行われ、その過程はどのようなものであったのだろうか。そうして成立した「指示詞」について、研究者達は何を問題として取り上げ研究を続けてきたのであろうか。本稿では、明治以降の文典類や研究論文の中から「指示詞」に関する記述を調べ、「指示詞」研究の歴史を振り返ってまとめながら、それぞれの文法学者や研究者の研究の違いを整理していこうと考える。

2. 用語の定義と文字遣い

本稿全体を通して使う用語および文字遣いについて、初めにその意味や用法を決めておくことにする。

「指示詞」ということばは、佐久間鼎の『現代日本語の表現と語法』(1951)でこのことばの使用が提唱され、それ以降この使用が広まっていくのであるが、本稿では、佐久間以前の文献に関して記述する際も、誤解の恐れがない限りこのことばを使う。

「なわばり」は「なわ張り」(神尾 1990)や「縄張り」(渡辺 1952)とも表記されるが、本稿ではすべて「なわばり」と表記する。情報所有の範囲という意味において、「なわばり」と「領域」は同じ意味で用いられる。

「現場指示」とは、指示対象が話の現場に存在し、主に視覚で捉えられるとき(音のように聴覚で捉えられる場合などもある)、それを指す指示方法である。また「文脈指示」とは、指示対象が話の現場に視覚的には存在せず、話や文章の中に存在するとき、それを指す指示方法である。

論文によっては、「コ系指示詞」のことを「コー系列」・「コ系」・「こ系」とか「コ」・「こ」で表すこともあり、しかもそれらが混用されることもある。すべて同じ意味である。基本的には、各論文の表現方法を尊重して使うことにし、混乱の恐れがない限り、本稿でも混用することがある。「ソ系指示詞」や「ア系指示詞」についても同様である。

主に明治期の文献における漢字やひらがなの旧字体は、すべて新字体に直して使うことにする。本文の記述を引用した場合は、原文の表記法に従う。

3. 日本語指示詞研究の歴史

歴史区分を「明治・大正」・「昭和前期」・「昭和後期・平成」の3つの時期に分け、古いものから新しいものへと資料を順に追っていくことに

する。「昭和前期」は佐久間鼎の『現代日本語の表現と語法』の再版が出た1951年までとし、1952年の渡辺実の「指示の言葉」以降の論文を「昭和後期・平成」に入れる。

3.1 明治・大正

3.1.1 大槻文彦

大槻が編集した『言海』(1889年、明治22年初版発行)は、日本で最初の本格的国語辞書である。その巻頭の「本書編纂ノ大意」のあとに載せられたのが『語法指南』で、これは『言海』を利用する者のために書かれた日本語文法の解説書である。『語法指南』の中の指示詞に関する記述をまとめる。

①代名詞を「人代名詞(ジンダイメイシ)」、「事、物、地位、方向等ニ就キテ用イル代名詞」、「指示代名詞」の3つに分けている。現在の用語の使い方と言えば、はじめの「人代名詞」が人称代名詞にあたり、あとの2つ「事、物、地位、方向等ニ就キテ用イル代名詞」と「指示代名詞」とが、2つ合わせて指示代名詞にあたる。

『言海』における代名詞の分類		現在の呼び方
代名詞	人代名詞(ジンダイメイシ)	人稱代名詞
	事、物、地位、方向等ニ就キテ用イル代名詞	指示代名詞
	指示代名詞	

②「人代名詞」は、表1のように「自称」・「対称」・「他称」・「不定称」の4つに分けている。

「自称」は「話ス人、自ラ、己ガ名ニ代ヘテ用イルモノナリ」、「対称」は「我ト相對シ我ガ話シ掛クル人ノ名ニ代エテイフモノナリ」、そして

表 1 人代名詞

自称	対称	他称	不定称
われ	なむぢ	かれ あれ	たれ (だれ)

「他称」は「二人ノ間ニ話シ出ス他ノ人ノ名ニ代ヘテイフモノナリ」と説明している。「人代名詞」の機能は、実際の名前（固有名詞）の代わりに用いる、すなわち「代用」だとしている。

③「事、物、地位、方向等ニ就キテ用イル代名詞」は、表 2 のようにまとめられている。

表 2 事、物、地位、方向等ニ就キテ用イル代名詞

	近称	中称	遠称	不定称
事物	これ こ	それ そ	あれ あ かれ か	いづれ なに (どれ)
地位	ここ	そこ	あしこ あそこ かしこ	いづこ いづく (どこ)
方向	こなた	そなた	あなた かなた	いづかた (どなた)
	こち	そち	あち	いづち (どち)

「近称ハ、最モ近キニイフ」、「中称ハ稍、離レタルニイフ」、「遠称ハ、遠キニイフ」、「不定称ハ、其レト定メヌ、又ハ知ラヌニイフ」と説明している。この説明から、話し手からの距離によって、「近称」・「中称」・「遠称」と3つに分類し、聞き手の存在は考慮されていないことがわかる。以後広く使われることになるこの呼び方は、『言海』の初版で初めて使用された。

④『語法指南』における「指示代名詞」ということばは、古典語の1語の代名詞「こ・そ・あ・か」に助詞の「の」を付けたものとして、表

3 のようにまとめられている。

表 3 指示代名詞

近称	中称	遠称	不定称
この	その	あの かの	いづれの (どの)

この部分の解説に、次のような記述がある。

凡ソ、代名詞ハ名詞ノ地位ニ代リテ立ツモノナルニ、こ、そ、あ、か等ヲ天爾遠波ノのト連ネテ用キルトキニハ、別ニ一種ノ意義ヲ起シ、其名詞ニハ代ハラズシテ、其名詞ノ上ニ立チテ、唯、其名詞ヲ指シ示スコトアリ、コレヲ指示代名詞 (Demonstrative.) トイフ。
(大槻 1996: 14-15)

この記述から次の2つのことがわかる。その1つは、「人代名詞」が人の名前の「代用」であったように、大部分の代名詞が名詞の「代用」であるということ。もう一つは、「これ・ここ・こなた・こち」類と「この」類の使い方が異なること。つまり前者が名詞の「代用」であるのに対し、後者は「こ」+「の」(助詞)の形で名詞の前に置き、名詞の代わりをするのではなく、ただ名詞を指す働きをするというのである。これら2つの類を一緒に仲間として扱うようになるには、後の佐久間鼎(1936)まで待たなければならない。

日本では、江戸時代末期からようやく本格的な西洋式文法学が始まった。江戸時代はオランダ語の影響を受け、明治時代になって開国してからは、主に英語の影響を受けるようになる。そして日本でも西洋の文法

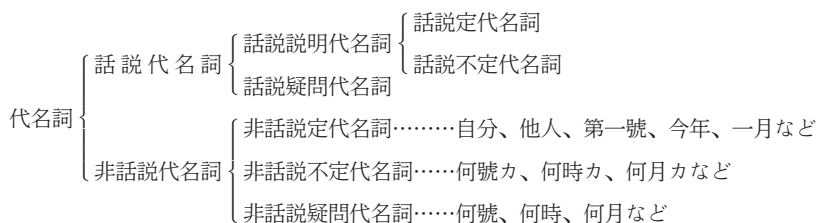
書の形式に倣って日本語の文法書がつくられた。『語法指南』はそのような文法書の1つである。

『語法指南』の中で、指示詞は代名詞の下位分類で扱われ、人称代名詞と（今日の意味での）指示代名詞は並立している。指示代名詞の分類は話し手からの距離によって分け、聞き手はこの分類に関与していない。

3. 1. 2 松下大三郎

松下大三郎の文法書は、『日本俗語文典』（1901年、明治34年）、『標準日本文法』（1924年、大正13年）、『改撰標準日本文法』（1928年、昭和3年）、『標準日本口語文法』（1930年、昭和5年）などがある。ここでは最も古い『日本俗語文典』をもとにして、指示詞に関する記述を整理する。なお、「俗語」とは口語のことを意味している。

①松下は代名詞に対して、次のような独自の分類と命名をおこなっている。



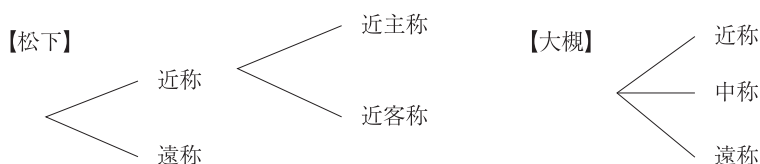
「話説」ということばをどのような意味で使ったかは、その定義が書かれていないので不明である。「非話説定代名詞」に「自分・他人・今年・一月」などが含まれていて、『言海』ではこれらを名詞として扱っているので、松下は大槻より代名詞を広く解釈していることがわかる。

②「話説定代名詞」とは、いわゆる人称代名詞を「自称（第一人称）」・「対称（第二人称）」・「外称（第三人称）」の3つに分け、さらに「外称」を「近称」・「中称」・「遠称」の3つに分けて、その3か所に指示代名詞を振り分けたものである。大槻が「不定称」としたものは、「話説不定代名詞」と「話説疑問代名詞」に分けている。『日本俗語文典』の中には、それぞれの分類に入ることばを表にしたものは載っていないが、説明の中で出てくる単語を使って「話説定代名詞」を表にしてみると、次の表4ようになる。

表4 話説定代名詞

自称 (第一人称)	対称 (第二人称)	外称 (第三人称)			
		近称 (近主称)	中称 (近客称)	遠称	
ワタシ ワタクシ ワシ オレ 拙者	アナタ オマイ キサマ	此奴 (コイツ)	其奴 (ソイツ)	彼奴 (アイツ) 奴 (ヤツ)	人
		コレ コイツ	ソレ ソイツ	アレ アイツ	事物
		此所 (ココ)	其所 (ソコ)	彼所 (アスコ) アソコ	所
		コッチ コチラ	ソッチ ソチラ	アッチ アチラ	方位

「近称」に対しては「近主称」、「中称」に対しては「近客称」と別称も付け加えている。この別称の命名法から、松下はまず「近称」と「遠称」に分け、次に「近称」をさらに「近主称」と「近客称」の2つに分けたことがわかる。大槻が初めから「三分法 (triplet)」をとっていたの対し、松下は言わば「二重二分法 (double binary)」とでも言うような方法をとっている。結果は同じ3分類であるが、途中経過が複雑になっている。



「近主称（近称）」は「話説の主体即話をする人に近き外物を指す代名詞にて」と説明し、「近客称（中称）」の方は「中称は遠近の中に位するものを指すにはあらで聴話者に近き事物を指すものなり」（下線筆者）と説明している。「近客称」の説明における「近い」は、遠近すなわち距離を基準にして考えているのではないとことわっている。従って、ここでの「近い」は「近い関係」としてとらえることができる。しかし、「近主称」における「近い」は距離とも関係とも受け取れ、曖昧である。さらに、大槻が話し手中心の距離説であったのに対し、松下は聞き手の存在も考慮している。

③「この・その・あの」や「こんな・そんな・あんな」に関しては、「口語にていふ此ノは形状詞にて代名詞にあらず」として、代名詞には含めていない。「形状詞」とは今日の学校文法の品詞で言えば、副詞・形容詞・形容動詞を合わせたものを指している。「こう・そう・ああ」などについては触れられていないが、これらの働きが副詞的であることより、「こう・そう・ああ」も形状詞と考えていたのではないと思われる。

大槻が人称代名詞と指示代名詞を並立の立場に置いていたのに対し、松下は人称代名詞の第三人称の中に指示代名詞を分けて入れた。この分類法は、次の山田にも受け継がれ、佐久間（1936）が発表されるまでは、最も一般的な分類法として定着することになる。

また距離による分類が主流であった当時に、松下は「近客称（中称）」

を聞き手に近い「関係」で分類したことは注目に値する。

3. 1. 3 山田孝雄

山田の日本語文法に関する文典類には『日本文法論』（1908年、明治41年）、『日本口語法講義』（1922年、大正11年）、『日本文法概論』（1936年、昭和11年）などがあるが、ここでは『日本口語法講義』をもとにして、指示詞に関係する部分をまとめることにする。

①人称代名詞の分類において、英語からの翻訳である「第一人称」・「第二人称」・「第三人称」や、大槻の『語法指南』で使われた「自称」・「対称」・「他称」という呼称は、『日本文法論』出版の頃にはすでに定着していた。しかし山田は「かの第二人称第三人称と称せらるゝものを見よ。何ぞ人に限らむ。」（山田 1943: 89）と記しているように、日本語では西洋語と異なり、「人称」によって分類されるものの中に人以外のものも含まれることを指摘し、「人称」の代わりに「称格」という用語を使っている。

②「第一称格」は話し手自身を表し、「第二称格」は聞き手を表す、「第三称格」には人に限らず「第一称格」・「第二称格」に入らないすべてのものが含まれる。そして「第三称格」は、表5のように、まず「定称」と「不定称」に分け、さらに「定称」の中を「近称」・「中称」・「遠称」の3つに分けている。この分類基準は空間的・時間的および精神的な遠近で、また聞き手の存在も関係する。

③表5では「この・その・あの」、「こんな・そんな・あんな」、「こう・そう・ああ」などがまだ入っていない。

「この・その・あの」について山田は、英語の指示代名詞「this（この）、these（これらの）」「that（その）、those（それらの）」を「形容

表 5

第一称格 (自称)	第二称格 (対称)	第三称格 (他称)				
		定称			不定称	
		近称	中称	遠称		
わたくし わたし (われ) (おれ) (僕)	あなた おまえ (きみ)	これ	それ	あれ	どなた だれ	人
					どれ なに	事物
		ここ	そこ	あそこ	どこ	場所
		こつち こちら	そつち そちら	あつち あちら	どつち どちら	方向

代名詞 (Adjective Pronoun)」と呼ぶ人もいるくらいで、英語では形容詞の中で扱っていると説明している。それに対して日本語では、文語の指示詞「こ・そ・あ」に助詞の「の」が付いたのもで、助詞の連体格の用法に現れる 1 つの現象にすぎないとしている。

「こんな・そんな・あんな」、「こう・そう・ああ」に関しては、代名詞の節では記述されていない。

人称代名詞の第三人称を 3 つに分け、そこに指示代名詞を振り分けて入れる方法は、すでに松下が採用している。山田と松下との違いは、松下が「不定称」を別枠で取り扱ったのに対し、山田は第三称格 (第三人称) の中に入れている点である。やや遅れて出版された安田喜代門の『国語法概説』(1928 年、昭和 3 年) でも、山田と同様の分類方法がとられている。後の佐久間 (1936) の中でも、この分類法が広く採用されていたことが記されている。

3. 2 昭和前期

3. 2. 1 時枝誠記

佐久間鼎の『現代日本語の表現と語法』の初版(1936)と再版(1951)の間に、時枝の『日本文法口語篇』(1950)が出版された。古さから言えば、佐久間の初版の方が古いのであるが、その後の研究で引用される佐久間の本はほとんどが再版の方である。その理由は次の3. 2. 2で記すことにする。そこで、先に時枝の『日本文法口語篇』の中の指示詞に関する部分をまとめることにする。

①代名詞を、大槻は名詞の代用と定義し、松下・山田は「指す詞」として定義したが、時枝は「話し手との関係概念を表す詞」と定義した。この意味を、「学生」ということばと「君」ということばの違いで説明しよう。「学生」ということばは、話し手が聞き手に対して「学生らしくしなさい」と使うこともできれば、第三者について「学生らしくするべきだ」とも使うことができる。しかし「君」ということばは、話し手に対して聞き手の関係にある人にしか用いることができないのである。つまり「君」は、話し手に対して聞き手という関係を表す詞と言える。

「話し手との関係概念を表す詞」のうち人を表すものが人称代名詞で、事物・場所・方角等を表すものが指示代名詞である。

②表6のように、人称代名詞を「話し手(第一人称)」・「聞き手(第二人称)」・「事柄(第三人称)」と分け、さらに「事柄」を「近称」・「中称」・「遠称」・「不定称」に分けた。そして指示代名詞をこの「事柄」の中に分けて入れている。呼び方は異なるが、この分類法はほぼ山田と同じである。「近称」・「中称」・「遠称」の分類基準は空間的距離の遠近ではなく、「話し手に近い関係か」・「聞き手に近い関係か」・「両者に対して第三者的關係か」と、「関係」によって分類している。松下は「近客

表 6

話 手 との 関係 事柄 の種類	話手 (第一人称)	聞手 (第二人称)	事柄 (第三人称)				
			近称	中称	遠称	不定称	
人	わたくし 僕	あなた 君	このかた	そのかた	あのかた	どのかた どなた	名詞的 代名詞
物			こ これ	そ それ	あ あれ	ど どれ	
所			ここ	そこ	あそこ	どこ	
方角			こちら こっち	そちら そっち	あちら あっち	どちら どっち	
関係			この	その	あの	どの	連体詞的 代名詞
情態			こんな かう こんなに	そんな さう そんなに	あんな ああ あんなに	どんな どう どんなに	副詞的 代名詞

称」に対してだけ、「関係」を使って分類していたが、時枝は一般化して、3分類全部を「関係」で説明している。

「この・その・あの」、「こんな・そんな・あんな」、「こう・そう・ああ」は、佐久間 (1936) ですでに代名詞の表に付け加えられている。上の表ではさらに「こんなに・そんなに・あんなに」が加えられて、それから4組を「連帶的代名詞」、「副詞的代名詞」と呼んでいる。

③「この」の用法に関する詳しい考察がある。「この絵は立派な絵ですね。この作者はだれですか。」(下線筆者) を例に挙げて、前半の「この」(以後「この₁」と記す) と、後半の「この」(以後「この₂」と記す) の違いについて説明している。「この₁」は話し手と絵との関係概念つまり話し手に近い関係にあるということだけを表すのに対し、「この₂」は「この絵」の意味で、話し手との関係概念を表わすだけではなく、話し手とそのような関係にある「絵」をも含めて表現していると解

説している。「この₁」のようなものを「連体詞的代名詞」、「この₂」のようなものを「体言的代名詞」または「名詞的代名詞 (noun pronoun)」と区別している。

時枝は代名詞の中に「関係」や「情態」を表す「連体詞的代名詞」や「副詞的代名詞」まで取り込み、結果的に指すことばの一群を代名詞の枠組みの中にほとんど取り込むことができた。次の段階では、この代名詞の枠組みを外して、新たに「指示詞」あるいは「コソアド」という枠組みで再編成することになる。

3. 2. 2 佐久間鼎

佐久間鼎の『現代日本語の表現と語法』は、1936年の初版と1951年の再版ではかなりの書き換えがおこなわれていて、後の研究で引用されるのはほとんど再版の方である。再版では第1章から第3章までが指示詞に関する部分で、この第3章に「なわばり」の説明と有名なコソアの図が描かれている。佐久間の理論の根幹をなすこの部分は、再版になってから付け加えられたものである。ここでも主にこの再販をもとに、佐久間の指示詞に関する説をまとめていくことにする。

①佐久間(1936)の中では、語源にとらわれることなく、「指す」機能をもつことばをすべて集めて、表7のように整理した。

表中の「性状」、「指定」、「容子」の欄は、佐久間(1936)より前ではなかったか、或いは特別扱いされてきたものである。佐久間はこのような形容詞的・副詞的な働きをするものも「指す」機能をもつことばの仲間に入れた。

「近称・中称・遠称」に付けられた “ ” の記号については、当時

表 7

	“近称”	“中称”	“遠称”	“不定称”
もの	コレ	ソレ	アレ	ドレ
方角	{コチラ コッチ	{ソチラ ソッチ	{アチラ アッチ	{ドチラ ドッチ
場所	ココ	ソコ	アスコ	ドコ
{もの 人(卑)}	コイツ	ソイツ	アイツ	ドイツ
性状	コンナ	ソンナ	アンナ	ドンナ
指定	コノ	ソノ	アノ	ドノ
容子	コ－	ソ－	ア－	ド－

既にこのような呼び方が定着していたので、不本意ながら「いわゆる」の意味でこの呼び方を使ったのである。事実「日本語のこの「近称・中称・遠称」にも、「いわゆる」を付けなくてはならないと思います。」(佐久間 1983: 19) とことわっている。

表 7 にまとめた「指す」機能をもったことばの一群を、「こそあど」あるいは「指示詞」、「指す語」などと呼ぶことを提唱している。

②①では「近称・中称・遠称」を話し手からの遠近で臨時に区別したが、この遠近による区別が適当でないと主張している。例えば方角の「こちら・そちら・あちら」は遠近と関係するとは限らないし、状態を表す「こんな・そんな・あんな」などについて遠近を考えるのはピントはずれだとしている。

ここで距離に依らない新たな分類法である「なわばり」が登場する。少し長くなるが、以降の指示詞研究の出発点となる重要な部分なのでそのまま引用する

話し手とその相手との
 相対して立つところに、
 現実のはなしの場ができ
 ます。その場は、まず話
 し手と相手との両極によ
 って分節して、いわば
 「なわばり」ができ、そ
 の分界も自然にきまって
 来ます。前にのべたよう

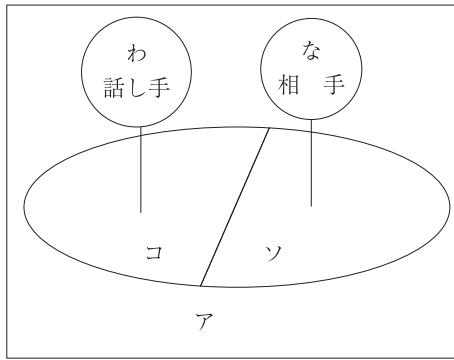


図1

に「これ」は話し手自身の勢力範囲に属します。はなし手といつか
 わりに、「われ」の「わ」を名としてこれを「わのなわばり」とい
 ってもいいわけです。これに対して、「それ」は相手の勢力範囲の
 中のものをさして言うので、「なれ」の「な」をとって「なのなわ
 ばり」に属しているということができます。それで、前者は「こ
 こ」に当り、後者は「そこ」に当るという関係になります。これを
 それぞれ（コ）と（ソ）で代表させますと、それ以外の範囲はすべ
 て（ア）に属します。「こちら・こっち」と「そちら・そっち」と
 「あちら・あっち」との関係も、この「わ」―「な」の対立の現場の
 事態に徴して意味をもつわけです。（佐久間 1983: 34-35）

話し手・聞き手の勢力範囲をそれぞれ「わのなわばり」・「なのなわば
 り」、それ以外を「あのなわばり」と佐久間（1951）の中で命名した。
 話し手と指示対象とを遠近によって分類する方法に換えて、指示対象が
 どのなわばりに属しているかによって3つに分類した。

③人称代名詞を3つに分け、そのうち「第三人称」あるいは「他称」
 をさらに3つに分けて、そこに指示代名詞を振り分ける方法は、佐久間

表 8

	指示されるもの	
	対話者の層	所属事物の層
話し手	(話し手自身) ワタクシ ワタシ	(話し手所 属のもの) コ系
相手	(話しかけ の目標) アナタ オマエ	(相手所属 のもの) ソ系
はたの ひと もの	(第三者) (アノヒト)	(はたのもの) ア系
不定	ドナタ ダ レ	ド系

の頃はすでに定着していた。しかし佐久間は「コソアドのいわゆる近称・中称・遠称と人称における自称・対称・他称との間の内面的な交渉が、単に外面的な、形式的な区分を超えて、あるはたらきを示すことを見のがしてはなりません。」(佐久間 1983: 33) と、人称代名詞と指示代名詞との間に対応関係があることに着目し、人称と事物の対応関係を表 8 のようにまとめている。②の「なわばり」の図からは現場指示を想定しやすいが、上の表 8 で「事物」とあるので、「事柄」すなわち文脈指示にも「なわばり」とコ・ソ・アの対応を考えているのがわかる。

佐久間以前は空間的・時間的および関係性の「遠近」による分類が主流だったが、佐久間以降になると「なわばり」による分類が主流となっていく。

高橋・鈴木の「コソアド関係研究文献 (1833～1980)」(高橋・鈴木 1982: 37-42) を見ると、『現代日本語の表現と語法』の初版が出た 1936 年直後、指示詞関係の論文の題名には、それ以前の論文と同様に、「代名詞」ということばが多く使われている。しかし 1951 年に再版が出さ

れると、一気に「指示（詞）」や「こ・そ・あ（ど）」がほとんどの関係論文の題名に使われるようになった。この原因は、初版では「指示詞」や「こそあど」ということばはまだ使われておらず、また「コ・ソ・アの図」も載せられていなかったため、佐久間の理論の根幹が理解されず、再版出版後にやっと広く理解されるに至ったと考えられる。

3.3 昭和後期・平成

3.3.1 渡辺実

渡辺（1952）では、53名の大学生に下記のような甲乙1組の文を、コ・ソ・アすべての組合せ $3 \times 3 = 9$ 組与えて、使い方の正誤を判断してもらい、その結果を分析している。

(1) 甲「これは／それは／あれはあなたの本ですか」

乙「いいえ、これは／それは／あれはわたしの本ではありません」

学生たちがすべて国文科の女子大学生ということで、調査対象者に偏りがあることを渡辺自身も認めているが、アンケート調査方式を採用しているという点で、興味深い試みである。詳しい調査結果についてはここでは省略するので、興味のある方は論文を見ていただきたい。論文中、指示詞のもつニュアンスの違いについて記述しているので、ここではそれを取り上げてまとめることにする。

①「こ」は、話し手が自分を中心とするなわばりの中に指示対象があると認めたときに使う。従って、自分のなわばり以外のものに「こ」を使った場合は、特殊な効果をもつ。例えば、次のような例を挙げてい

る。

(2) 「こらッ！ 信号を無視する奴があるかッ！」

「こらッ！」と一喝することによって、聞き手を即座に自分の勢力下（なわばり）の中に引きずり込んで、主導権を取ろうとする意思が「こ」には込められているとし、これを近称「こ」のもつ「人格無視・頭ごなし」といふ優越性」と表現している。

②「そ」は、話し手が指示対象を自分のなわばりではなく聞き手のなわばりにあると認めたときに使う。この「そ」は、話し手と聞き手が向かい合って指示するときに使うのが基本だが、並び合った場面でも使うことがあるとし、次のような例を挙げている。

(3) 甲「アノー、府庁へはどう行くのでせうか」

乙「そこの辻ネ、そこを右に折れると正面に見えますからすぐわかるでせう」

乙は、指示対象の「そこの辻」とか「そこ」を、相手の甲のなわばりに押し込むことによって、その曲り角が甲のすぐ近くであると思わせる効果がある。これを渡辺は「押し込んで指す「そ」と呼んでいる。この種の「そ」の使い方については、渡辺以降の論文でもたびたび取り上げられている。

③「あ」については、話し手一人あるいは話し手と聞き手二人を中心とする弱いなわばりであるとしている。「こ」・「そ」のなわばりについては佐久間とまったく同じであるが、「あ」についてはだいぶ異なる。また、「あ」は「積極的な據り處を与えない指し方」とも表現し、その

ため「こ」や「そ」に比べると性格にくせがなく、相手に与える刺激が最も少ないという。次の例のような、見知らぬ人への話しかけ

(4)「アノー、帝塚山三丁目つてどのあたりでせうか」

は、「あ」のそのような特徴を利用して使われるのだと説明している。

「こらッ!」とか「アノー」などは、今日では感嘆詞に分類されるが、これらのことばから指示詞「こ・そ・あ」のもつニュアンス違いを説明している。多くの論文が指示詞の指示機能について考察している中で、指示詞の意味分析にまで言及しており、このあとで取り上げる論文でもこのような点に全く触れられていないので、貴重な資料といえる。

3. 3. 2 三上章

佐久間は、話し手と聞き手に対立する話の場を楕円的に描いたが（俯瞰的に描いているため楕円と見えるのであって、実際は円かもしれない）、三上（1955）ではそれを発展させ楕円的なもの、円的なものと2つに分けた。

①機能の面から、代名詞を次のように分類している。

{	直接指示 (demonstrative) — 大部分の代名詞の作用	
	文脈承前 (anaphoric) {	中称化した代名詞による <u>代理</u> 名詞の部分的反復による <u>代表</u>

大部分の代名詞の機能が「直接指示」で、一部の代名詞（実は、ソ系代名詞）と名詞の繰り返しに「文脈承前」の機能があるとしている。

表 9

	近称（求心的）		遠称（離心的）	
	A 称	H 称	他称	疑問称
物	ソレ ソイツ	コレ コイツ	アレ アイツ	ドレ（何） ドイツ
所	ソコ	ココ	アソコ	（ドコ）
方	ソチラ ソッチ	コチラ コッチ	アチラ アッチ	ドチラ ドッチ
人	あなた おまえ きみ	わたし おれ	カレ	ドナタ ダレ

「文脈承前」については、下の③で説明する。

代名詞を次の表 9 のように分類している。まず、全体を「近称」と「遠称」に分け、「近称」のうち「A 称」にはソ系と人称代名詞の第二人称にあたるものを、「H 称」にはコ系と人称代名詞の第一人称にあたるものを入れている。「遠称」は「他称」と「疑問称」に分け、「他称」にはア系と人称代名詞の第三人称にあたるものを入れている。「疑問称」は、それまで「不定称」と呼ばれたものである。

②代名詞使い分けの場面を、図 2 のように、楕円的なものと円的なものに分類している。

まず話し手と聞き手が対立して存在すると、そこには両者を楕円の 2 焦点とする領域ができ、両者はこの領域を半分に分ける。このとき話し手の領域と聞き手の領域には、それぞれコとソが対応する。この状態ではアが対応する領域はまだ現れていない。

次に、話し手と聞き手が心理的に近づくと、2 焦点は重なり領域は楕円から円に変わる。このとき聞き手は消えることはないが、聞き手の領域は話し手の領域に吸収されてしまう。領域は話し手の領域である円内

と、円外に分かれ、それぞれにコとアが対応するとしている。

「コレ、ソレ、アレは同一平面を同時的に分割するものではない。ソレ対コレとアレ対コレとは異時的であり、異質的である。」(三上 1976: 178) とあり、楕円的な領域と円的な領域が同時に現れることはないとしている。

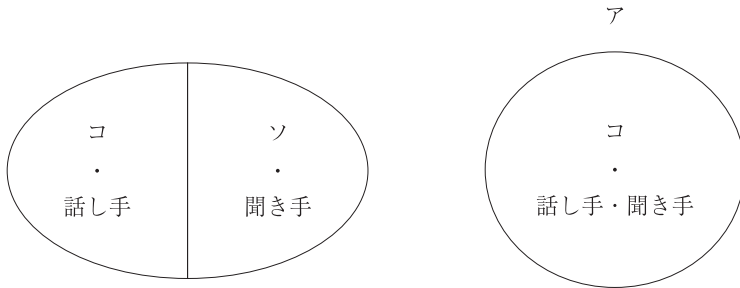


図 2

③話し手の先行発言を話し手自身が指す場合ソが使われるが、このとき仮に聞き手がいたとしても聞き手は発言に全く関係していない。三上はこれをソが指示機能を失ったと表現している。自らの先行発言を指し、直接指示としての指示機能を失ったソの働きを「文脈承前」といい、この働きを持つソを「中称のソ」と呼んだ。中称は「遠近の中間の中ではなく、中立中和の中称」(三上 1976: 179) の意味だと記している。

三上 (1976) のレジュメにおいて、代名詞の機能を指示機能 (直接指示) が本来のものであって、承前機能は指示機能から派生したものと考えているが、その派生経緯ははっきりしないと記している。しかしながら、現在の日本語指示詞の使用実態を観察すると、文脈指示のソの使用率が圧倒的に多く、続いてコ、アの順番になる。「中称のソ」も当然多数あると考えられる。三上の説をそのまま受け入れると、派生して出現

した機能が本来の機能を席捲してしまったといえる。

3.3.3 高橋太郎

高橋（1956）の主要テーマは、「場」と「場面」に関する考察である。しかし、論文中で佐久間のなわばり理論では説明できない例を指摘し、高橋独自のコ・ソ・アのなわばり関係を図示しているので、ここではそれらを紹介する。

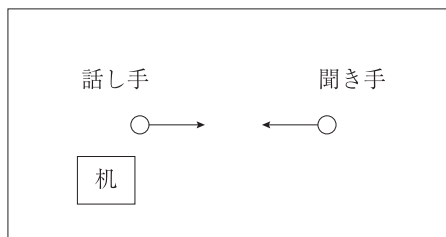


図 3

①図3のように、部屋の中で話し手と聞き手が向かい合ったとき、話し手が聞き手に向かって「その机をごらん」という場合がある。このとき、机は聞き手よりも話し手に近いので、佐久間の説ではコを使わなければならないが、実際はソが使われると指摘し、佐久間の説が成立しない場合を示した。

②コ・ソ・アのなわばり関係を、「わたしの日ごろの場面観察をもとにして」と断って、次の図4のように5つに分類している。

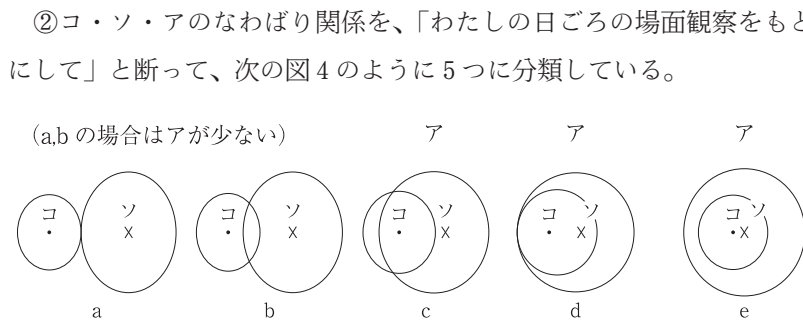


図 4

分類全体の特徴は、次の3つにまとめられる。

- (1) コ・ソのなわばりは、それぞれ話し手、聞き手が中心の円形の領域である。
- (2) コのなわばりよりもソのなわばりの方が大きい。
- (3) 話し手の後ろにソのなわばりが出現するとアのなわばりも出現する。

(3) については「相手が自分と同じ位置にくる場合に始めてア系の位置づけができる」とし、はじめからアのなわばりが現れている佐久間説を修正する必要があるとしている。

高橋は三上のような楕円の領域は考えていないが、話し手と聞き手が重なったときアが出現する点は、三上の円的領域の説明と同じである。

3.3.4 服部四郎

服部は、1961年8月号の『英語青年』に上の高橋と同様な反例を挙げて、佐久間のなわばりの図とは異なる独自のなわばりの図を発表した。その後11月号で宮田がそれに反論し、服部（1968）で再度修正したなわばりの図を発表している。以下にその過程をまとめる。

①服部（1961）では、話し手と聞き手が向かい合って話をしている場合に、話し手が自分の後ろにあるものを指してソレということがあることを指摘している。これは、聞き手よりも話し手の近くにあるものはコで指すとする佐久間の説に反する。

そこで服部は、佐久間のなわばりの

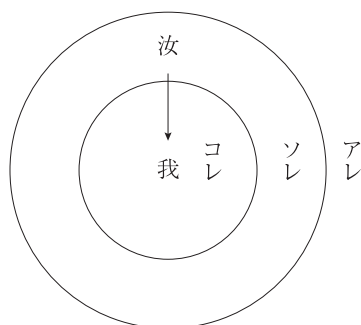


図5

図に変わる、独自のなわばりを図5のように示した。佐久間の図が楕円を折半しているのに対し、服部の図は「我」を中心とする同心円で描いている。

また矢印は、抱いている子供に話しかけるような特殊な場合で、「汝」が「我」の領域に入ってくる場合があると考えている。

②ところが宮田（1961）では、服部が指摘した、話し手が自分の後ろにあるものを指して「ソレ」というのは、たとえあるとしても一般的ではないと反論している。

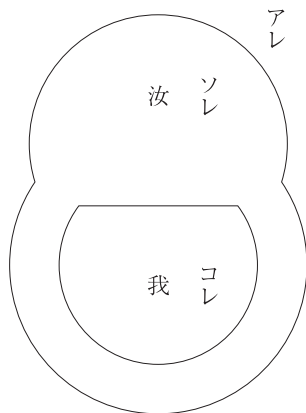


図6

宮田は、話し手が自分の後ろのものを指すときは、後ろを振り向いたり視点を移動したりして「コレ」とか「アレ」を使って指す方が一般的であるとした。しかもさらに、話し手と聞き手が向かい合っていて、話し手が自分の後ろに掛っている絵などを、後ろを振り向くことなくまた視点を移動することもなく、「コレ」とか「アレ」で（使い分けは話し手と絵との距離による）

指すこともあると付け加えた。しかし「ソ

レ」を使うとしたら、両者の話の中に出てきたものを指すためであって、現場指示ではなく文脈指示の用法だとしている。

③これに対して、服部（1968）では、服部の出身である三重県亀山市地域の方言と東京方言では指示詞の使い方に違いがあることに気付き、「私の言葉の指示代名詞領域」と断って示されたのが図6である。コレがソレによって囲まれているが、全体がくぼみをもった楕円形で、コレ・ソレ・アレが出現しており、佐久間の図1にやや近くなった。その後この領域は、大阪人にも受け入れられたので、三重県亀山市付近だけ

でなくもう少し大きな範囲で使われる可能性がある」と説明している。

高橋や服部が指摘した、話し手の後ろにあるものを「ソレ」と指すことは、筆者の言語感覚から考えて一般的な指し方であると考ええる。ただし、多くの場合は宮田が指摘するように、体や首を後ろに向けたりして視点を移動させたり、指差し動作を伴うのがほとんどである。従って視点移動や指差し動作が伴えば、話し手の後ろにあるものを「ソレ」と指すことは、「コレ」・「アレ」とともに可能であると思われる。

3. 3. 5 阪田雪子

阪田（1971）では、高橋、服部と同様に、佐久間の説の反例を提出している。そしてその反例を解決するために、佐久間のような話し手と聞き手による相対的なわばりを考えるのではなく、話し手を中心とした絶対的なわばりを考えている。

①佐久間の表8（p. 204）を見ると、話の現場において「対話者の層」と「所属事物の層」およびコソアドとが整然と対応している。ところが、阪田はその対応関係の反例を示した。例えば、「あなたのこの服」という言い方は、佐久間の説では「あなた」に対してはソ系が対応しなければならず、ありえない表現になってしまう。

これを合理的に説明するため、阪田は話し手と聞き手が接近して重なり合ったとき、「われわれのなわばり」とでも呼ぶべき領域がつくられ、その中ではコ系が使われるとして、この問題を解決した。

さらに、「われわれのなわばり」の外側では一般にア系が使われるが、詳しく観察すると、ア系を使うほど遠くないなわばりが存在し、そこではソ系を使うとしている。次のような例を挙げている。

(5) 「そこを左に曲がって」

と、君子が運転手にいった。 『重役の椅子』 源氏鶏太

この例では、君子と運転手は「われわれのなわばり」をつくり、その外側のあまり遠くないところを指して、「そこ」とソ系を使って指示しているのだと説明している。

以上のように、現場指示においては、佐久間が示した話し手と聞き手が対立する相対的なわばりではなくて、阪田は話し手を中心とする絶対的なわばりというものを考えている。論文にはその図は表示されていないが、描くとすれば服部の図5 (p. 211) のようになるであろう。

②文脈指示において、佐久間の説では相手の発言はソ系で指し、話し手自身の先行発言はコ系で指すことになるが、実際はこれもソ系を使うのが普通であるとして、次のような例を挙げている。

(6) 「昔希臘にクリシツパスと云う哲学者があつたが、君は知るまい」

「知らない。それがどうしたのさ」

「其男が笑ひ過ぎて死んだんだ」

『吾輩は猫である』 夏目漱石

3番目の発話における「其男」は、佐久間の説では「此男」となる。しかし阪田は現場指示と同様、「われわれのなわばり」を使って「其男」が成り立つことを説明している。つまり、話し手と聞き手が一体となって「われわれのなわばり」をつくり、「其男」を自分たちから心理的に少し離れた所に置いて客観的なものと捉えたので、ソ系が使われたので

ある。もし仮に、話し手自身にとって身近なものと捉えればコ系が使われる。

③会話においてア系を使うのは、2つの場合がある。

その一つは、話し手と聞き手が共通に持っている知識などを指す場合である。次のような例を挙げている。

(7) 矢張 君はいったい、あの人の何だね。

第三の男 あの人は。

矢張 白ばくれちゃいけない。鹿ちゃんのことだ。

第三の男 ああ……あの人は信者です。自分も信者です。

『マリアの首』田中千禾夫

この一連の会話に出てくる3つの「あの人」が、話し手と聞き手の共通の知識を指していると阪田は説明している。しかし必ずしもそうとは限らないであろう。最初の「あの人」は話し手の矢張だけが共通の知識だと思いこんで使い、2つ目の「あの人」は矢張の発言をそのまま使って聞き返しているだけとも受け取れる。確実に共通の知識となっているのは、第三の男も認めた後の3つ目の「あの人」だけである。

もう一つは、聞き手に関係なく、話し手一人が自分の意識の中にあるものを指す場合である。次のような例を挙げている。

(8) 唯圓 今日はよく晴れて比叡山があの様にはっきりと見えます。

親鸞 (坐わる) あの山には今も沢山な修行者がゐるのだがな。

唯圓 あなたも昔あの山に永くいらしたのですね。

親鸞 九つの時に初めて登山して、二十九の時に法然様に遇ふまでは大てい彼の山で修業したのです。

唯圓 その頃の事が思われませうね。

親鸞 あの頃の事は忘れられないね。若々しい精進と憧憬との間にまじめに一すぢに煩悶したのだからな。

『出家とその弟子』 倉田百三

唯圓は親鸞とともに修行したわけではないので、「あの頃」と表現しているのは親鸞一人の意識の中にあるものであって、しかも時間的に遠い過去のことを指しているのでア系が使われたと説明している。

「われわれのなわばり」は、話し手と聞き手が重なったときに現れるので、三上の円的領域とほぼ同様なものである。異なる点は三上の場合にはコとアの領域しか現れなかったが、阪田の場合は、コとアの間にソが現れることである。

3.3.6 久野暲

久野（1973）では、文脈指示にしばって、主にアー系列とソー系列の用法の違いを中心に考察している。

①文脈指示におけるアー系列、ソー系列の用法を、次のように整理している。

アー系列：その代名詞の実世界における指示対象を、話し手、聞き手ともによく知っている場合にのみ用いられる。

ソー系列：話し手自身は指示対象をよく知っているが、聞き手が指示対象をよく知っていないだろうと想定した場合、あるいは、話し手自身が指示対象をよく知らない場合に用いられ

る。

(金水・田窪 1992: 69)

表 10 指示対象の認知

	話し手	聞き手
アー系列	知っている	知っている
ソー系列	知っている	知らない
	知らない	

話し手・聞き手と指示対象を知っているか否かの関係は、表 10 のようにまとめられる。例として、次のようなものが挙げられている。

(9) 話し手：先週神田デ火事ガアリマシタ。

ソノ火事デ、学生ガ二人死ンダソウデス。

聞き手：ソノ火事ノコトハ、新聞デ読ミマシタ。

(10) 聞き手：私モチョウド神田ニイテ、ソノ (アノ) 火事ヲ見マシタ。アレ (*ソレ) ハヒドイ火事デシタネ。

(9) の話し手のソノは、話し手自身は火事があったことを知っているが、聞き手が火事のことを知らないだろうと想定して使われたのである。一方、聞き手のソノは、自分が火事を目撃したわけでもなく、従って指示対象である火事のことをよく知らないために使われたのである。それは結果的に「新聞デ読ミマシタ」からもわかる。

(10) は (9) の話し手の発言に対して、聞き手が別の答え方をした場合である。はじめのソノについては、自分は火事を目撃しているので指示対象である火事のことをよく知っている。従って、相手が指示対象の

火事のことをよく知らないだろうと想定してソノが使われたことになる。

アノ、アレについては、二人とも火事のことを知っていると確認できたのでアー系列が使われたと説明できる。

②コー系列の用法には、目に見えないものをあたかも存在するかのよう_にに指す用法があるとして、次のような例を挙げている。

(11) 僕ノ友人ニ山田トイウ人ガイルンデスガ、コノ男ハナカナカノ理論家デ…

(12) アア、ソノ (アノ、*コノ) 人ナラ、僕モヨク知ッテイマスヨ。

アノ (*ソノ、*コノ) 人ハ随分議論好キデスネ。

(11) は話し手が知人の山田を話題に取り上げて、話の現場にはいない、つまり目に見えない山田をコノを使って指している。久野はこのようなコー系列の用法は、まるで指示対象が目の前にいるかのような感じをもたせる働きがあり、「眼前指示代名詞」的色彩が強いとしている。眼前指示とは、いわゆる現場指示のことである。

(12) は話し手の発話 (11) を受けて、聞き手が応じた発話である。ソノも「おそらく、眼前指示的用法であろう」と、久野は判断の確定を保留している。最初のアノは、話し手、聞き手双方とも指示対象の山田を知っていて、アー系列が使われたのである。後半のアノについては、話し手と聞き手が指示対象を共に知っていることが確認されると、それ以降、話し手はコレを使えなくなるし、聞き手はソレを使えなくなって、アー系列だけが使われることになる_と説明している。

久野は、文脈指示におけるアー系列の用法では、話し手と聞き手の双

方が指示対象をよく知っていなければならないとしている。しかし、阪田（1971）中の親鸞と唯圓の会話の例では、話し手の親鸞だけが指示対象を知っていて、聞き手の唯圓は知らない。従って、久野の説の反例が既に提出されていたことになる。

3. 3. 7 堀口和吉

堀口（1978b）では、「知覚対象指示」と「観念対象指示」という2つの用語が使われているので、はじめにこの用語の意味を説明しておくことにする。

一人の人間が他に伝達することを目的としないで、考えたりあるいは独り言を言ったりすることがあり、このような状況においても指示詞が使われる場合がある。このようなとき、指示対象を知覚で捉えた場合には「知覚対象指示」と呼び、意識のうちに捉えた場合を「観念対象指示」と呼ぶ。例えば「あの山」というのは、実際に視覚で捉えた山を指しているのであれば「知覚対象指示」であり、以前登ったことがある山を思って指したのであれば「観念対象指示」である。ところが「あの旅行」の場合は「観念対象指示」だけしかありえない。

①現場指示における指示詞使用の基準は、話し手と指示対象との関わりの強弱によって決まり、基本的に聞き手は関係しないとしている。そして、コ、ソ、アの使い分けについては、話し手と聞き手が相対する場において、コは話し手と強い関わりをもつ対象を強烈に指示するとき使われ、ソは話し手と弱い関わりをもつ対象を平静に指示するとき使う。アについては、話し手と強い関わりをもち、話し手と聞き手がつくる場の外の遠いところにある対象を強烈に指示するとき使うとしている。「強い」、「弱い」、「強烈に」、「平静に」などについての詳しい説明はな

い。次のような例が挙げられている。

(13) A 「コノ／ソノ 絵ハピカソダネ」

B 「ウン、コレ／ソレハピカソダヨ」

(14) A 「アノ 花ハ桜ダネ」

B 「イヤ、(アレハ、ソレハ、コレハ) 桃ダヨ」

例 (13) では、 $2 \times 2 = 4$ 通りの組合せがすべて可能で、その違いは話し手が対象のピカソの絵を自分に関わりが強いと思えば強烈指示のコを用い、関わりが弱いと思えば平静指示のソを用いると説明している。例 (14) でも、コ・ソを使ったときは反発の気持ちが入り多少ニュアンスが異なるが、コ・ソ・アどれも使える。

②知覚対象指示と現場指示はどちらも対象を知覚しているので区別するのが難しい。両者の違いは、知覚の実態を他に示す場合が現場指示で、示さない場合が知覚対象指示である。

この2つの指示の特徴は、知覚対象指示ではコとアが圧倒的に多くてソが少なく、逆に現場指示ではソが多くなる。その理由は、現場指示が使われる話の場では、聞き手が存在するケースが多いためであるとしている。聞き手が存在することで、話し手は自己との関わりの強い強烈指示のコやアを使うのを抑えて、平静指示のソを使うというのである。しかしこれでは、コ・ソ・アの使用は聞き手に関係せず、すべて話し手と対象との関わりの強弱で決まるという掘口自身の説に矛盾してしまうことになる。

③文脈指示においてもコ・ソ・アの使い分けは、基本的に現場指示と同様で、話し手と対象との関わりの強弱で決まるとしている。次のよう

な例が挙げられている。

(15) A「オ金ヲ貸シテ下サイ」

B「コレハ困リマシタ。今持チ合ワセガナイノデス」

(16) A「昨日友達ト京都ニ行キマシタ」

B「ソレハヨカッタデスネ、ソノ友達ハ田中サンデスカ」

(17) A「秋ニ弟ガ日光ニ行キマス」

B「アア、アソコハイイ所ダヨ」

(15)、(17) が話し手との関わりが強い強烈指示のコとアで、(16) が話し手との関わりが弱い平静指示のソである。

文脈指示の特徴として次の2点を挙げている。

その1つは、アの使用が少ないことである。その理由は、文脈指示において対象が話し手にとって遥かな存在であるという状況がもともと少ないこと、さらに、話し手が、遥かな指示対象を自分に関わりが強いものとして捉える事が、必ずしも聞き手に理解されるとは限らず、そのような発言は控えた方がいいということからによるとしている。これを「社交の既定」と表現している。

もう1つの特徴は、ソしか使えない場合である。次のような例を挙げている。

(18) 人ヲ見タラ、ソレ (人) ヲ泥棒ト思エ。

箱がアッタノデ、ソレ (箱) ニ入レタ。

スグ雨ガアガルカラ、ソレ (雨ガアガルノ) ヲ待ッテ出ナサイ。

確かにこれらの例では、コやアに換えることはできず、換えると別の意味になってしまう。ところが①の例 (13)、(14) で示した例はコやアに交換可能である。直前に挙げた例 (18) とどこが違うのであろうか。その理由を堀口は「叙述の完了」という点に着目して説明している。交換可能な例は叙述が完了しており、その結果、完了した叙述内の事物は「明瞭な存在」となることができる。「明瞭な存在」となっているからこそ、話し手は叙述内の対象と強い関わりを持つことができ、従って強烈指示のコやアが使えるのである。一方叙述が完了しないときは、叙述内の事物は「明瞭な存在」となることができず、従って話し手は叙述内の事物と強い関わりを持つことができない、よって平静指示のソを使うことになるというのである。

④観念対象指示は独り言に多いのであるが、対話においても積極的に用いられることがあるとして、次のような例を挙げている。

(19) A 「アレを持ッて来テクレ」

B 「ハイ、承知シマシタ」

A は意識の中で思っている対象を B に明示していないので、観念対象指示になる。しかしこれがもし

(20) 「二階ニカバンガ置イテアル。アレヲ持ッて来テクレ」

となれば、先行する発話の中に指示対象の「カバン」があるので、これは文脈指示となる。

観念対象指示にはアが多く使われるのだが、一体どうしてだろうか。

堀口は「他人の観念にある遥かでない存在を推察するということは、きわめて困難だからであろう」と推測している。

また観念対象指示は、話し手の意識の中の対象を、聞き手も同様に意識してくれるだろうと期待して使うので、それが成功した際には両者に一体感や仲間意識というものが生まれる効果がある。

堀口は、現場指示においてはソが非常に多く使われるといい、文脈指示ではソだけしか使えない場合があるという。知覚対象指示や観念対象指示の使用率は現場指示や文脈指示に比べれば圧倒的に少ないので、そうすると、指示がこれら4種類だけであるとすれば、必然的にコ・ソ・アのなかでソの使用率が一番多いことになる。これは確かに日本語指示詞の使用実態と一致する。

3. 3. 8 黒田成幸

黒田（1979）中で使われるいくつかの用語について、はじめに説明しておく。

「独立的用法」とは、現場指示に近い意味である。論文中で胃潰瘍を患っている人の例が出てくるが、この人が自分の胃潰瘍を指したとき、それは体内にあって目には見えないので現場指示とはいえないが、このような場合も現場指示に含めて、「独立的用法」と呼んでいる。「照応的用法」とは文脈指示のことである。

「直接的知識」とは、「体験的知識」とも言い換えられていて、直接体験によって得られる知識である。一方「間接的知識」とは、「概念的知識」とも言い換えられ、直接体験によっては得られない、例えば伝聞などによって得られるような知識のことである。ある事物について「直接的知識」をもつということは、その事物について基本的には無限の知識

を持つことで、一方「間接的知識」をもつということは、その事物について限定的で、わずかな知識しかもたないことである。

①独り言（音声を発しない内言も含む）におけるアとソの使い分けは、独立的用法・照応的用法いずれの場合も、指示対象に対して、直接的知識をもてばア（またはコ）を使い、間接的知識をもてばソを使うとしている。簡単にいえば、指示対象をよく知っていればア（またはコ）を使い、あまり知らなければソを使うというのである。

照応的用法として挙げられている例は、次のようなものである。（この節の例文の下線はすべて筆者による）

(21) 山田さんは田中先生とかいう人のことばかり話していたけれど、その人はどんなに偉い人なのだろうか。

(22) 今日山田さんに会ったけれど、あの人と会ったのは一体何年ぶりのことだろう。

(21) については、「田中先生」は未知の人で、話し手は間接的あるいは概念的な知識しかもっていないためソが使われた。一方 (22) では、話し手と「山田さん」は旧知の仲で、直接的あるいは体験的な知識をもっているためアが使われたのである。

独立的用法では、次のような例が挙げられている。何か執筆することになって、何を書くか思案しているときにふとある事を思いついて

(23) うん、まあ、そのことでも書いてみるか。

(24) うん、まあ、あのことでも書いてみるか。

と考えたとき、(23) では書こうとすることに対して、まだ漠然としたイメージしかもっておらず構想もまとまっていない感じを与える。一方、(24) の方は書こうとすることに対して、過去に思い出深い体験があり、今でもそれに対してははっきりしたイメージをもっているような印象を与える。つまりソを使ったときは間接的あるいは概念的な知識しかもっておらず、一方アを使ったときは直接的あるいは体験的な知識をもっているのである。

②対話における照応的用法については、独り言と同じ結果を出している。つまり、話し手が指示対象に対して、直接的知識をもてばアを使い、間接的知識をもてばソを使うとしている。しかし独立的用法については、独り言と異なり聞き手の存在が指示詞使用に関与するとしている。

まず照応的用法においては、次のような例を挙げている。

(25) 君は大阪で山田太郎という先生に教わったそうだけど、その先生は講義が上手かい。

(26) 僕は大阪で山田太郎という先生に教わったんだけど、君もあの先生につくといいよ。

(25) では、話し手は「山田太郎という先生」と面識がないので、間接的あるいは概念的知識しかもっておらずソが使われた。一方 (26) では、話し手は面識があり教わるという体験もしている、つまり直接的あるいは体験的知識をもっているのでアが使われたのである。

独立的用法については、残念ながら具体例を挙げていないので、その解説からア・ソの使い分けを理解することにする。まず、聞き手が存在せず話し手と指示対象だけとの場面では、話し手は指示対象をアで指す。それは、独立的用法の指示対象は物体だけであり、話し手はそれを基本

的に視覚でとらえ、対象に対して直接的知識をもつことができるからである。次に、聞き手が対象の側に現れると、指示詞はアからソに変貌する。その理由は、話し手も聞き手も対象を視覚でとらえることによって直接的知識をもっているのであるが、対象が聞き手の側にあることで、話し手は聞き手の方が自分より多くの直接的知識をもっていると判断し、それでソを使うのである。つまり独立的用法の場合は、話し手が聞き手の存在を認め、聞き手と話の場を分け合っていることを認めているのだとしている。

③独り言や対話におけるソとアの使い分けについてわかったことは、聞き手の存在が関与するのは、表 11 のように対話の独立的用法のときだけである。また、ソを使うのは間接的知識をもつとき、アを使うのは直接的知識をもつときである、とまとめることができる。

表 11 聞き手の関与

	独り言	対話
独立的用法	なし	あり
照応的用法	なし	なし

堀口と同様、黒田も独り言について分析した。それまでのほとんどの論文が話し手と聞き手の存在を当然のものとして扱ってきたのに対し、黒田は「何れにせよ、単純な観念の水準で話し手・聞き手というものの存在が保障されている城の外に出て、指示詞の用法を先ず事実問題として見極める必要がある」（金水・田窪 1992: 93-94）と積極的に聞き手の存在を消去することによって、聞き手の役割や聞き手とソとの関係を浮き彫りにしたと言える。

3.3.9 神尾昭雄

神尾(1990)では、情報を与える文や語句とその情報が存在するなわばりとの関係について考察している。ここでは文レベルではなく語句レベルにおいて、指示詞となわばりの関係をまとめる。

コ・ソ・アに対応するなわばりを、現場指示のときは「指示のなわばり」と呼び、文脈指示のときは「情報のなわばり」と呼び分けている。

①現場指示においては、基本的に佐久間の説を踏襲している。つまり話し手のなわばりはコ、聞き手のなわばりはソ、そして話し手・聞き手両者の外のなわばりはアで表すとして、図8のように対応関係を示している。

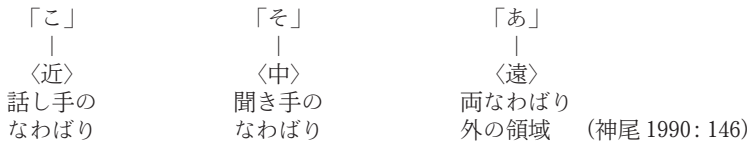


図8

〈近〉、〈中〉、〈遠〉は話し手から指示対象までの心理的距離を表す。次のような例が挙げられている。

(27) X1: この本、捨てていいよ。

Y1: え、その本捨てちゃっていいの？

X2: うん。

(Y が本をゴミ箱に投げ捨てる。)

X3: あの本はもう見たくないんだ。

X1 では、本が話し手 X のなわばり内にあるのでコが使われた。Y1 では、話し手 Y に対して聞き手 X のなわばりに本があるのでソが使わ

れている。Y が本をゴミ箱に投げ捨てることにより、本が話し手・聞き手のなわばりの外に出たので、X3 ではアが使われる。

②文脈指示については、ソ系が文脈指示を代表する指示詞であるとして、ソ系指示詞の使用原則を次のようにまとめている。

- a. 話し手は、自分が一旦述べた情報は聞き手の情報のなわばりに属するものとみなす。
- b. 聞き手は、話し手が一旦述べた情報は話し手自身のなわばりに属するものとみなす。

(神尾 1990 : 148)

次のような例を挙げている。

(28) X : 北海道にね、富良野という町があって、そこはスキー場で有名なんだ。

Y : へえー、そんな町聞いたこともないな。

ここでは話し手を X、聞き手を Y と固定して考える。X の発話における「そこ」は、「富良野という町」を指すが、既に聞き手 Y に向かって話された内容の一部なので、その情報は原則 a より、聞き手のなわばりに属すると考える。一方 Y の発話における「そんな町」は同じく「富良野」を指すが、これは話し手 X からもたらされた情報なので、原則 b より、その情報は話し手のなわばりに属していると考ええる。どちらの場合も情報が相手のなわばりにあるためソ系が使われる。

コとソの違いについては、当然ながらソについては上の使用原則が成り立つが、それに加えて、コを使ったときは情報が自分にとって身近な

ものと受け止めたときで、一方ソを使ったときは情報に対して中立・冷静な立場をとったときであるとしている。例は次のようなものである。

(29) X：社長が昨晚倒れて、入院しました。

Y：それ／これ／*あれは大変だ。

もしYが社長と近い関係の者であれば、Xから情報を得たとき自分にとって身近で、大事なこととみなしてコを使う。ところが、Yと社長との関係が近くないのであれば、中立・冷静な態度でソを使うのである。アの使用はありえない。

③アについては、文脈外で話し手によって記憶された情報を指すとしている。次のような例が挙げられている。

(30) 戦争直後はみんな苦しかったけど、あの頃の世の中にはなんとも言えない活気があったなあ。

「あの頃」とは戦争直後の時期を指すのであるが、もしそれが先行発話内にある「戦争直後」を指すのであれば「その頃」が使われる。ここでは話し手が過去の記憶の中から戦争直後を思い起こして「あの頃」と指しているのである。

文脈指示に関するコ・ソ・アの関係を次のような図にまとめている。ここで〈近〉とか〈遠〉は、上でも断ったように、話し手からの心理的距離を表す。興味深いのは、アが〈近〉ともなり〈遠〉ともなることである。アの働きは話し手の記憶の中にあるものを指すのであるが、それは話の現場ではなく時間的に遠く離れた過去にあるので、話し手からの心理的距離としては〈遠〉となる。しかし、アが話し手自身の記憶を指

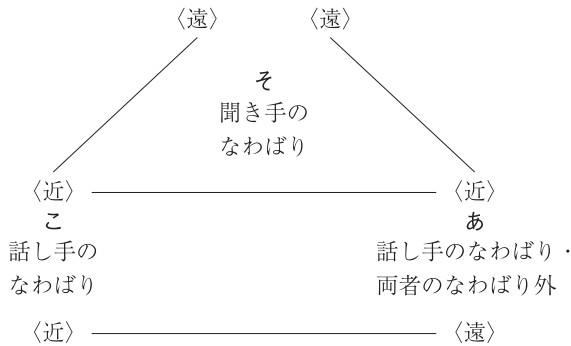


図 9

すので、聞き手のなわばりと比較すれば〈近〉にもなるというわけである。

コ・ソのなわばりについては、神尾は佐久間の説をほぼ踏襲している。異なる点は、文脈指示における話し手の先行発話は、佐久間の説に従うと話し手のなわばりに属していると考えてコが使われるが、神尾は聞き手に向かって話したのだから聞き手のなわばりに属していると考えてソを使う点である。

話し手・聞き手とコ・ソ・アとの対応について、佐久間の説の反例がいくつか既に出されているのに、それらをどのように解決しようとしていたのかは不明である。

3. 3. 10 金水敏・田窪行則

金水・田窪（1990）では、指示詞を談話という、文よりはやや大きな単位の中でとらえて研究している。

論文のタイトルに使われている「談話管理理論」ということばの意味は、下で紹介する研究結果には直接関係しないが、論文のタイトルに使

われていることばなので、論文中の説明を付けておく。

われわれは、言葉を使っていろいろなことができる。しかし、その基本になっているのは、情報の交換である。すなわち、人にこちらの知っていることを教えたり、相手に自分の知らないことを聞いたり、確認したりする作業である。(途中省略) このような対話・談話における情報の交換を談話管理と呼ぶ。そして、談話管理に参加するものとしての聞き手・話し手を談話管理者と呼ぶことにする。

(金水・田窪 1992: 123-124)

また、これから紹介する研究結果では、メンタルスペース理論における用語が使われているので、先にそれも説明しておく。

二つの対象 a と b が、(語用論的) 関数 F によって a が b に結合しているとき $b = F(a)$ と書き、 a を「指示トリガー」、 b を「指示ターゲット」、 F を「コネクター」と呼ぶ。Fauconnier (1987) には次のような例が載っている。

Plato is on the top shelf. (プラトンは一番上の段にある。)

この例文の意味は、プラトンの書いた本あるいはプラトンについて書かれた本は棚の一番上にあることを表している。つまり「プラトン」という人名が「プラトンの本」を指しているのである。これを「プラトン」という人物名が、「プラトンの本」に結合すると考えると、上で決めた表記法によって

[プラトンの本] = F ([プラトン])

と表わされる。このとき「プラトン」を指示トリガー、「プラトンの本」を指示ターゲット、F をコネクターと呼ぶ。尚、トリガーには「引き金」という意味がある。

以上の準備の下で、この論文で金水・田窪が示している1つの結果を紹介する。

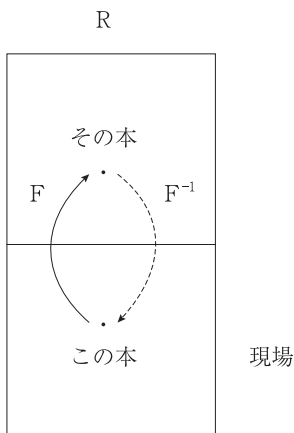


図 10

①次の a から d は、すべて1人の人物の一連の発話である。

- a. 私は10年前1冊の本を書いた。
- b. {その本／?あの本} は人々に高く評価され、賞をとった。
- c. それがこの本だ。
- d. {この本／*その本} は今でも多くの学生に読まれている。

bの「その本」は、aにおける10年前に書いた本を指していて、文脈指示である。またcの「この本」は、話し手が持っているかあるいは話し手の近くにある本を指していて、現場指示である。d以降の発話を想定したとき、本を指すのに「この本」が優先して使われるとしている。そうすると、話の現場と文脈指示が使われる非現場とを比べた場合、現場の方が指示トリガーとして優先的に選ばれることになる。その関係を次のような式で表し、また図10によって示している。図でRは話し手の心理空間を表し、それを2つの部分空間に分けて、下は現場の情報が

格納されている「現場スペース」、上は現場以外の情報が格納されている「非現場・非経験スペース」を表している。

$$F(\text{コ (現場)}) = \text{ソ (非現場・非経験)}$$

また、「その本」を「この本」に対応させる F^{-1} は成立しないとしている。

②①の一連の発話で a、b は変えずに、
c、d の発話を少し変えてみる。

- a. 私は 10 年前 1 冊の本を書いた。
- b. {その本 / ? あの本} は人々に高く評価され、賞をとった。
- c. それがこの前君にやったあの本だ。
- d. {あの本 / * その本} は今でも多くの学生に読まれている。

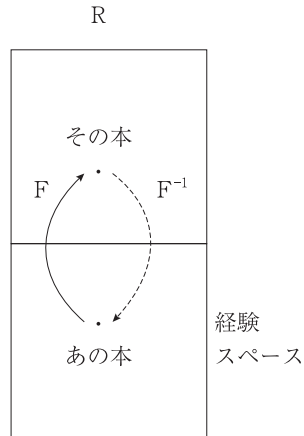


図 11

b の「その本」は同じく文脈指示である。c の「あの本」は以前聞き手にあげた本のことで、話し手の経験の中のものを指している。d 以降の発話を想定したとき、「あの本」が優先されるとしている。従って経験と文脈指示が使われる非現場を比べると経験が指示トリガーとして優先されることになる。これを次のような式で表し、図 11 によって示している。図の下段の部分空間は、経験に関する情報が格納されている「経験スペース」である。

F (ア (経験)) = ソ (非現場・非経験)

このときも「その本」を「あの本」に対応させる F^{-1} は成り立たないとしている。

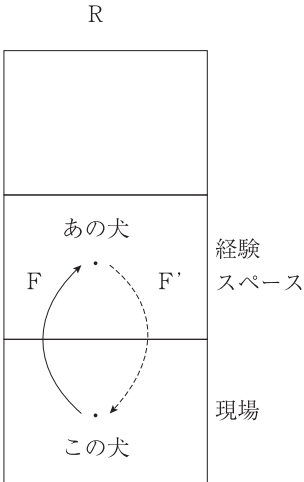


図 12

③最後に現場と経験を比較してみる。次も同じく 1 人の人物の一連の発話である。

- a. この家には、子犬がいましたね。
- b. あの犬、とても可愛かったな。
- c. え、これがあの犬ですか。
- d. 私、{この犬／??あの犬} によくパンをやりましたよ。

c では「これ」(「この犬」) が指示トリガーとなり、指示ターゲットの「あの犬」に

結合される。d 以降の発話を想定したとき、上の 2 つの例とは異なり、金水・田窪は「普通の文脈では」と断って、「この犬」が優先されるとしている。そうすると、現場と経験を比べた場合、現場の方が経験より優先して指示トリガーとして選ばれることになる。この関係を次のような式で表し、図 12 によって示している。

F (コ (現場)) = ア (経験)

「普通の文脈では」と断った理由は、d 以降の発話でずっと回想が続き、「あの犬」が立て続けに選ばれることも考えられるからである。こ

のような場合を取り除いて考えている。

以上3つの考察から、指示トリガーの優先順位について次のような関係があることを示している。

日本語の指示トリガー・ハイアラーキー：現場＞経験スペース＞その他

「すなわち、日本語では、指示トリガーとしてより現場に近い要素を選ぶ傾向がある。」と結論づけている。

日本語指示詞の残されている問題の1つとして、現場指示と文脈指示の関係をどのように統一的に説明するかという問題がある。金水・田窪の方法は、談話という文よりも大きな単位の中に、現場指示・文脈指示・経験指示など複数の指示を同時につくり、メンタルスペース理論を利用して部分空間どうしをコネクターで結び、その関係性を探ろうとするものである。この手法が、上記の問題を解く突破口になるのかもしれない。

4. おわりに

大槻文彦の『語法指南』から最後は金水敏・田窪行則（1990）まで約100年にわたって、指示詞成立の過程と、文法学者や研究者が指示詞に対してどのような見方をし、何を問題点としてきたかを見てきた。残念ながら1990年以降のこの約20年間を残してしまった。できるだけ早い時期にこの20年間の最新の研究動向をまとめたいと考えている。

佐久間（1951）後、すぐに佐久間のなわばり理論の欠陥が指摘される。

しかし、「代名詞」の枠に押し込まれていたものを解き放って、「指示詞」という新しい分野を切り開くきっかけをつくったということで、佐久間はおおいに評価されていいだろう。時間の問題でいずれ他の誰かが同じ発想をしたかもしれないが、佐久間が最初にそれを行ったということは、間違いのない歴史的事実である。

参考文献

- 大槻文彦 1996 『語法指南』 日本語文法研究書大成 2 勉誠社
- 松下大三郎 1997 『日本俗語文典』 日本語文法研究書大成 3 勉誠社
- 山田孝雄 1943 『日本口語法講義』 宝文館
- 山田孝雄 1925 『日本口語法講義』 宝文館
- 安田喜代門 1928 『国語法概説』 中興館 日本の言語学 4 大修館書店
- 佐久間鼎 1936 『現代日本語の表現と語法』 厚生閣
- 佐久間鼎 1983 『現代日本語の表現と語法』 くろしお出版
- 時枝誠記 1950 『日本文法口語篇』 岩波書店
- 渡辺実 1952 「指示の言葉」『女子大文学』5 大阪女子大学国文学科
- 三上章 1955 『現代語法新説』 刀江書院
- 三上章 1976 『現代語法新説』 くろしお出版
- 高橋太郎 1956 「『場面』と『場』」『国語国文』25-9 京都大学文学部国語国文学研究室
- 服部四郎 1961 「『これ』『ソレ』と this, that」『英語青年』107-8
- 服部四郎 1968 「コレ・ソレ・アレと this, that」『英語基礎語彙の研究』三省堂
- 宮田幸一 1961 「日本語と英語の指示詞—服部四郎氏の考察を読んで—」『英語青年』107-11
- 阪田雪子 1971 「指示詞『コ・ソ・ア』の機能について」『東京外国語大学論集』21
- 久野璋 1973 『日本文法研究』 大修館書店
- 堀口和吉 1978b 「指示語の表現性」『日本語・日本文化』8 (大阪外国語大学)
- 黒田成幸 1979 「(コ)・ソ・アについて」『林栄一教授還暦記念論文集・英語と日本語と』くろしお出版
- 神尾昭雄 1990 『情報のなわ張り理論—言語の機能分析』 大修館書店
- 金水敏, 田窪行則 1990 「談話管理理論からみた日本語の指示詞」
- 金水敏, 田窪行則編 1992 『指示詞』(日本語研究資料集第1期第7巻) ひつじ書房

Fauconnier, Gill 1984 Mental Spaces MIT Press (翻訳:『メンタル・スペース—自然言語理解の認知インターフェース』 坂原・水光・田窪・三藤訳 1987 白水社)